

氏名	日高 良祐
ヨミガナ	ヒダカ リョウスケ
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博音第292号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	(論文) 音楽ファイルのメディア技術史 —音楽配信成立過程における伝送の実践—

論文等審査委員

主査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	毛利 嘉孝
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	熊倉 純子
副査	東京藝術大学	准教授	(音楽学部)	市村 作知雄
副査	東京藝術大学	准教授	(音楽学部)	丸井 淳史
副査	成城大学	教授	(文芸学部)	東谷 護

(論文内容の要旨)

本論文の目的は、レコード音楽史観的な「音楽ファイル」像が社会に定着する以前に目を向け、多様な使われ方をしてきた音楽ファイルフォーマットの系譜を跡づけることである。技術とユーザーの相互的な形成作用に注意を向けながら「音楽ファイル」史を読み直すことで、1990年代を舞台に繰り広げられてきた多様な音楽実践と構築されていく規制との間に生じていた抗争の歴史を明らかにする。

ここでの「音楽ファイル」とは1990年代末になってレコード産業が提示した、CDを音源として作成されたデジタル録音物としての音楽メディアを指す。具体的には、MP3、WMA、ATRAC3などの「圧縮フォーマット」と呼ばれるものである。一方、歴史的にはより広い捉え方における多様な音楽ファイルフォーマットの技術と、それを使用する実践が存在してきた。具体的には、MIDIデータ、MODなどを挙げることができる。本論文では、「音楽ファイル」史以前に目を向け、ここでの多様な音楽ファイルフォーマットを使用した実践を対象としている。それらがパソコン通信やインターネット接続を介して伝送されていく中で、アマチュア音楽家による実践がなされてきたのである。そうした伝送実践を取り上げ、ある特定のメディア技術の現在の姿や使われ方を自明視してしまう態度を退け、その社会的役割が確定する以前に出現していた多様な形態を明らかにしていくというメディア技術史の手法によって考察する。

第1章では、まずレコード音楽史観的な「音楽ファイル」像について、その捉えられ方を詳しく説明する。レコード産業が提示したデジタル録音物としての「音楽ファイル」像が、どのような契機を経て社会に定着していったのかを示す。さらに、デジタル化した音楽メディアとしての「音楽ファイル」についてこれから考察していく理論的な土台を示すため、ジョン・スターンが提示した「フォーマット理論」を紹介し、検討を加える。

第2章では、音楽ファイルフォーマットの使用のはじまりについて確認するために、まず日本でのパソコンの普及過程について概観する。ハードウェアとソフトウェア双方の技術的な制約から日本固有のコンテクストが生みだされていった過程を示す。その上で、「ホビーとしてのパソコン」、「楽器としてのパソコン」という異なった意味づけを行なうユーザー集団の登場を取り上げ、それぞれが音楽実践を行なっていく契機について考察する。

第3章では、1990年代に入って隆盛したMIDIデータの伝送実践について詳しく考察する。アマチュア音楽家がパソコンで制作したMIDIデータを、パソコン通信を介することで伝送し合う実践を「DTM (Desk Top Music) 文化」として捉え、その技術的コンテクストを明らかにしていく。そこで伝送されていたMIDIデータの実態をもとに、ユーザー集団が新しいメディア技術に対して発揮した多様な想像力について考察する。

第4章では、MIDIデータ伝送実践の領域を支えてきた電子楽器産業に焦点をあてる。彼らはMIDIデータを取り巻く制度を構築しようとする中で、一方ではDTM文化の技術的コンテクストを支援し、他方ではそれらを産業的編成のもとに動員していった。電子楽器産業とJASRAC(日本音楽著作権協会)との間でなされてきた音楽著作権に関する使用ルールの制定過程を軸に、伝送実践の領域が制度化されていく様相を考察する。

第5章では、音楽ファイルフォーマットが伝送される領域の市場化過程について、電子楽器産業とレコード産業との間で争われた構想の違いについて考察する。「ケータイ」という新しいメディア技術の実用化によって、その抗争は引き起こされた。介入可能性の高さに依拠してきたMIDIデータ伝送実践が圧縮フォーマットの技術的コンテクストの形成によって衰退し、「音楽ファイル」像が社会に提示されていく過程について考察する。

第6章では、これまでに論じてきたものとは異なった音楽ファイルフォーマットの使用のコンテクストとして、MODを取り上げる。制度化が進められていく「音楽ファイル」に対し、そのオルタナティブとして多様な伝送実践を創り出してきたMODについて、「インターネット的」なイデオロギーの導入という側面から考察する。

終章では、レコード音楽史観的な「音楽ファイル」観に収斂しきってしまったかに見える今日の状況に対して、音楽ファイルフォーマットの伝送実践が現在でも展開している事例を取り上げ、検討する。その上で本論文の研究に関する今後の課題を示す。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、一般に「デジタルからアナログへ」、あるいは「レコードからCD、そしてデータ配信へ」という流れで語られてきた音楽メディアの発展を、音楽データの形式に焦点を当て、特にコンピュータ・ユーザとアマチュアの音楽実践者の視

点を導入することで、音楽産業によって語られてきたものとは異なった音楽史、そして、音楽産業が見ることができなかった別のデジタル音楽の歴史を再構成するという試みである。

本論文の成果は大きく以下の三点にまとめられる。

第一に、当時のパソコン雑誌やデスクトップミュージック関連の雑誌のアーカイブ調査、そしてその当時に実際に音楽やプログラムを作っていた実践者に対する詳細なインタビューとフィールドワークからなるその研究はパソコンによるデジタル音楽の黎明期の状況を生き生きとした状況を丁寧に記した一次的資料として高く評価できる。特に 1980 年代後半から 1990 年代の状況についてはまだ十分に歴史化されておらず、情報も散逸、未整理のままである。その現状の下で先駆的な調査研究と言える。

第二に、特に社会学、文化産業論、情報社会学、科学技術社会論（STS）にまたがる研究は、既存のポピュラー音楽史の根底を問い直す野心的な試みであり、今後のポピュラー音楽研究や文化研究の研究者にとって参照すべき研究と考えられる。特にデジタル音楽の発展におけるトランスナショナルなユーザーコミュニティの役割の重要性の指摘など注目すべき発見が見られる。

最後に、ジョナサン・スターンの「フォーマット理論」など最新のメディア文化理論を取り入れた議論が、MIDI など日本独自のデジタルファイル文化を分析することを通じて批判的に検証されており、日本のみならず英米圏のメディア理論に対しても重要な事例研究として評価されると考える。

ほとんど先行研究のない新しい領域であることもあり、収集したデータを全て生かしきれず、時には過度に制度論や技術決定論になってしまい、全体の論旨が混乱しているところが見られたが、口述審査においてそれらの問に対して十分に明確な回答を得られた。総合的には、今後ポピュラー文化におけるデジタル音楽の発展史の先駆的かつ出発点になる重要な研究であると考え、博士号授与に相応しい論文として評価したい。